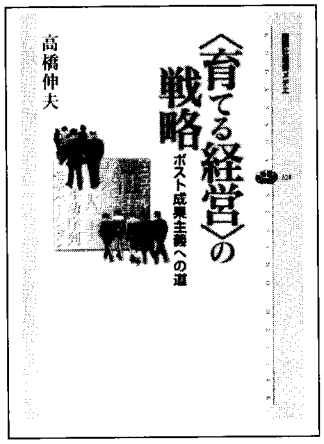
高橋伸夫

『〈育てる経営〉の戦略』

講談社 二〇〇五年



選書は難しい

前作『虚妄の成果主義』（日経ＢＰ社）が『週刊ダイヤモンド』の「二〇〇四年ベスト経済書」に選ばれたりしたので、二匹目のドジョウを狙って続編を書いたのだろうと思われがちだが、事情は全く逆である。

まず、今回の『〈育てる経営〉の戦略』（講談社）は、実はビジネス書ではないのである。なんと「講談社選書メチエ」シリーズの中の一冊として書かれたものなのだ。実物をご覧になれば分かるが、ビジネス書と比べれば、活字も小さいし、文字が詰まって見える。そもそもビジネス書のコーナーには置いていない本屋が多い。

しかも執筆を引き受けたのは五年位前で、『虚妄の成果主義』よりずっと前のお話だった。実は、引き受けてすぐに執筆に着手していたのである。ではどうしてこんなことになったのか。一言で言えば、選書の執筆は本当に難しい。これに尽きる。

私は本でも論文でも、いわゆる遅筆な方ではない。しかし、この本だけは本当に時間がかかった。このメチエ・シリーズでは、私の東大教養学部助手時代の先輩がシリーズ開始時に本を書いていたりして、私はそれなりにシリーズに親近感をもっていた。そのため、最初、執筆の話が来たとき、気楽に引き受け、そして気楽に原稿を書き始めたのだ。ところが、実際に書き始めると、とたんに行き詰ってしまった。経営学ほど「薀蓄を傾ける」という言葉が似合わない学問はないと痛感した。

何かそれらしきことをしようと思ったら、外国人の名前とカタカナだらけになる。なんとも薄っぺらで底が浅い。所詮は輸入学問なのかと悲しくなってきた。実際、二章ほど書いてはみたものの、何度推敲し直しても納得できず（というか、「これは選書ではないだろう」と落胆して）、放棄したこともあるのだ。

そうこうしているうちに『経営の再生』（有斐閣）の新版を出すための作業が入ってきたり、『できる社員は「やり過ごす」』の日経ビジネス人文庫版のための長い「あとがき」を書かされたりと、作業はどんどん遅れていった。何度も、講談社には、やめさせてくれとお願いしたりもした。

開き直った

そんな中、あんまり書けないので嫌気が差して、気分転換を兼ねて（現実逃避？）、一ヶ月ちょっとを使って『虚妄の成果主義』を書き上げた。ところが、これがなんとベストセラー入りしてしまった。これでは編集者に合わせる顔がない。しかもそれからが大変で、新聞・雑誌の取材やら原稿執筆依頼やら講演依頼やらが文字通り殺到したのだ。（興味のある方は、私のホーム・ページ

http://www.e.u-tokyo.ac.jp/~nobuta/

の著作物一覧のコーナーをご覧ください。雰囲気が伝わると思います）

その上、公認会計士試験第二次試験の試験委員もしていたせいで、秋には、採点に一ヶ月丸々がつぶれてしまった。二〇〇四年は大変な一年になってしまったのだ。

しかし、怪我の功名とでもいうべきか。そのおかげで講演やセミナーで話す機会が増え、繰り返し繰り返しこの本の前半を構成する四つの章のようなお話を話しているうちに、ぼやーっとではあるが輸入学問ではない薀蓄のイメージが湧いてきたのだ。二〇〇五年に入って、気持ち的に開き直れて、その気になっているうちに（これが薀蓄だと思っているうちに）、一気に原稿を書いて、なんとか出版までこぎつけたのが『〈育てる経営〉の戦略』なのである。

自分で言うのも気が引けるが、この本は読みやすいし面白いと思う。基本的に講演会などで使っているネタをもとにしているので、難しい話もほとんどない。

人事・労務の専門家ではないし

ちなみに、この本は、人事労務のシステムに的を絞っていた『虚妄の成果主義』と比べるとかなりテーマの幅が広い。

私は、もともと経営組織論が専門だったが、経営に関係するものは、請われれば原則的に何でも研究することにしている。ここ数年の論文のテーマだけでも、複雑系で有名になったマルチエージェント型のコンピュータ・シミュレーション、ＮＰＯ評価、鉄道業、海運業の研究、さらにはオープン・ソースや技術移転、ライセンス・ビジネスにまで及ぶ。『虚妄の成果主義』のおかげで、世間では私を人事・労務の専門家だと思っている人が多いが、もともと専門でもないし、私的には隅っこの研究テーマにすぎない。

ということで、今回の本では、第六章のリソース・ベースの戦略論（ＲＢＶ）の話は、この分野の解説としては、かなり分かりやすく書いているはずである。研究者仲間には評判がいい。

また、今年、控訴審で和解に至った青色ＬＥＤ訴訟では、ライセンス・ビジネスの観点から意見書を提出しているが、この本の第七章は、まさに青色ＬＥＤ訴訟の控訴審に提出した意見書をもとにしてライセンス・ビジネスについて書かれている。〈育てる経営〉について多角的に考えてみるには、いいきっかけになるはずである。人によっては、この第七章が一番面白かったと言う人もいる。

ともかく、私はこれでようやく解放されたわけで、今は心安らかな日々（？）を送れるようになり、その意味でも、この本の出版はとてもうれしい。（売れれば、もっとうれしいが……）

東京大学大学院教授
高橋伸夫（昭55年卒）